

ミセス編集部刊

秋扇愁魚

一色次郎

秋扇愁魚

検印廃止

定価*六八〇円

普通送料*七〇円

書留送料*一二〇円

昭和四四年一〇月八日*初版発行

著者*一色次郎

発行者*大沼 淳

発行所*文化服装学院出版局

東京都渋谷区代々木三ノ二一ノ一

(郵便番号一五二)

振替*東京一九五六七〇番

印刷所*大日本法令印刷株式会社

株式会社 精興社

製本所*大口製本印刷株式会社

目

次

秋扇・愁魚

七

天女・道玄坂

二七

水天宮・赫夜姬

三〇

富嶽・銀扇

三三

鯉魚・龍門

三八

伊賀路

一〇三

肥後路

一二七

阿蘇路

一三七

信濃抄

一四三

霧笛

一九五

水平線

二〇一

山麓

二二三

後記

二一〇

写真・山田久米夫

中村良英

秋扇愁魚

秋扇・愁魚

しゅうせんしゅうぎょ

朝になると、雨はやんでいたが、庭の空気は冷たかった。風はないのだが、地面が濡れているので身の引き締まるような冷気が、足元から湧いて来る。目を上げると、澄んだ青い空が、際限もなく広がっていた。果てから果てまで、ひと目で見ることの出来ない視界にあまる青空の広さに、私は、ふと、恐れを抱いた。水底から、小魚が水面を通して空を眺めた時もこれと同じかも知れない。私は小魚の心をのぞいたような気がした。

秋の長雨のあとである。軒端から、少し離れたところにまぶしいようにいて、あまり熱の籠もらない弱い太陽が、光っている。それでもしばらくすると濡縁があぶられて湯気を立てはじめた。廻りの様子を見て、いっぺん家の中へ戻った。仕事部屋から、ガラスで出来た箱型の金魚鉢を抱えて来て、濡縁に置いた。妻が、前掛けの端で指先を拭いながら、すぐお勝手から出て来た。

「あなたは、今日はかわいいそうよ」

私の顔をのぞいて心配そうに話し掛ける。私は妻を見ないようにして、

「何の話だね」

妻は、私かとぼけていることがわかってから、構わず自分の氣持を訴えつづける。

「雨上がりは、池の水が冷たいから、すぐ死んでしまうつていつかおっしゃったじゃありませんか」

妻と、私の額が、鉢の上で触れそうになった。妻は濡縁にしゃがんでいる。私は、また庭へ降りている。話しているうちに、ふたりの顔が水面へ寄って行ったのだ。

藻の間に、二匹の金魚が浮いていた。横から眺めるガラス越しの金魚の姿には、泳いでいると言ってもよい程の活発な動きはない。と言って、漂っていると言うのも当たらない。それほど無氣力でもなさそうである。動くでもなく、止まるでもなく金魚は無心に浮いている。青空の雲のように……。一匹は、全身染め上げたように真っ赤である。一匹は、反対に一点のしみもない。どちらも、二年半の琉金りゅうきんと言う種類の金魚である。

戦争が終わってから十年ばかり経ったころ、私は、家族を連れて東京の都心から西の郊外へ移転してきた。このあたりには、別に戦争で破壊されたようなものは何も見

当たらない。麦畑の中を都心へ向かう私鉄が走り、沿線には防風林に囲まれた農家が、点在していた。夜明け前に朝靄の中を散歩すると、鶏の卵をくわえた鷄いたちが茶畑の間を駆け抜け、どこかの小屋から逃げて来たらしい番へいの兎が野菜畑の陰にしゃがんでいたりした。前に住んでいたところと同じ東京とは、とても考えられない。別天地へ移り住んだようである。地名には、関の字がついている。武蔵野を西から江戸へ入る旅人が、きびしい詮議を受けたところのようであった。

私は、この武蔵関へ移り住むようになると、その年から金魚を飼いはじめた。越してしばらくたったころ年寄りの金魚きんぎょ売りが通り掛かった。リヤカーに棚を作り、ガラス鉢を沢山並べて大小さまざまな金魚を入れてある。ガラス鉢は、二段、三段に積み重ねてある。横から透けて見える水の壁の中に、降りしきる紅葉のように金魚が一斉に動いている。見事な眺めであった。私は、後先の考えもなく二匹買ってしまった。金魚鉢も老人から分けて貰った。私はこの鉢を机の上に置いた。

私は、毎日、何時間かを金魚を眺めて暮らした。目の前にあるので見ようと思わなくても、目に入ってくる。私は、金魚を見ながら小説を考えた。これから、自分の書

く小説に出て来るひとのことを思った。筋がまとまるとペンを取る。男のひとと女のひととの会話のやり取りが、うまく運ばないような時には、金魚を相手のひとに見立てて、頭の中で話し掛け胸にはね返って来る言葉をもとにして場面をすすめた。

金魚が、妖しい魅力を振り撒くのは、深夜であった。金魚の色彩を正確に捕えるには、太陽の光よりも電燈のほうがふさわしかった。電燈の明かりに照し出されると、金魚の艶が一段ときわだった。廻りが薄暗いので、ガラスが鏡になって、金魚の姿をうつした。金魚が鉢の中程から脇へ寄って行くと、ガラスの向こうからも一匹近づいて来る。二匹の金魚は、友を見つけたようにガラス越しに口づけをし、それからびったり並んで泳いだ。一方の角を曲ると一匹はこつぜんと消えてしまい、ガラスのこちら側の金魚だけが横向きになって泳いでいた。殊に白い金魚が、赤い金魚とすれ違う際は、素晴しかった。白い肌に真っ赤な肌色がうつる。が、それは、ほんの一瞬であった。すれ違うたびに、白い金魚の一部が赤く染まるとは限らなかった。二匹の金魚の間隔、光線を受ける角度、いろんなものが作用した。それでも、一時間に何回かは、白い肌に赤い肌がうつった。その瞬間を目に捕えると、私の胸はしびれた。胸の奥か

ら思わず呻吟^{うめき}が漏れた。金魚は、白日に晒して眺めるような魚^{うし}ではない。闇の魚である。夜遊び、昼間は藻蔭に憩^{さかな}う魚である。私と同じである。妻が眠ると私は机に向かい、夜が明けて外の世界が騒々しくなると、ペンを置いて寢床に入った。妻は、隣りの部屋で、ふたりの小さな女の子を相手にしょんぼり食事をする。私はまた、小説の筋に行き詰ると、金魚鉢を引き寄せ、ガラスに額をつけて、頭のはてりを冷ました。熱病の時、氷嚢をあてがわれているように心地よかった。しかし、それは頭の一点が冷たいだけで、そこを冷やすことで、他の部分のはてりが、一層激しくなっていくように思われるのだった。妻は、かわいそうだと言って夜中になると、金魚に風呂敷を被せた。

「寝せてあげなさい」

と、言う。私は、覆いを取ってまた金魚鉢に見入った。妻は、やがて、金魚に嫉妬するようになった。

秋の長雨のあと、金魚鉢を濡縁に持ち出したのは、訳があった。私はこの二匹の金魚を捨てようとしているのであった。妻が気にするからではない。庭に霜が降り、雑

木林の落葉木が、うつすら色づきはじめたからである。

秋に、始末するもののひとつに、扇がある。空気が、ひんやり肌寒くなると、女のひとは、夏に着たものと一緒に、扇をしまう。秋の扇、秋扇と言う言葉があるように、女のひとの大切な秋の行いのひとつである。けれども、ていねいに、ガーゼで拭いて、小箱で冬眠させて貰えるのは、象牙や白檀びゃくだんの扇子だけで、無造作に、紙と竹でこしらえたような雑物は、破れていなくても、捨てられてしまう。保存しておいても翌年になると、かびた古本のページをめくるように、色が変わり、香りは消えてしまうからである。この、秋の扇と同じように、私は、優雅な琉金を始末しようとしている。むろん、こうなるまでには、いろいろのいきさつがあった。

最初の琉金を失った時のことを私は、今でも忘れることが出来ない。その時も金魚鉢は、縁先に出してあった。なるべく、陽当たりのよいところに置いて、毎日決まった時間に、半分位ずつ、水を取り替えるように、と言う金魚屋の注意だったからだ。昼過ぎの、陽差しの強いころあいを見計らって、私は、水替えに掛かった。まず、半分、こぼした。これは、簡単だった。ところが、小さな洗面器に汲んで来た水をあ